

わ

が

街

わ

が

故

郷

平和発條株式会社 篠山工場と丹波篠山について

平和発條株式会社の主力工場の一つである篠山工場と篠山市についてご紹介いたします。

《会社の紹介》

商 標 **HHK Crane**

社 名 平和発條株式会社

本 社 〒532-0031

大阪市淀川区加島 3 丁目 7 番26号

TEL 06-6302-5311

篠山工場 〒669-2823

兵庫県篠山市大山下380番地

TEL 079-596-0335

《会社の沿革》

昭和26年(1951) 4 月

精密ばね、ばね座金の専門メーカーとして
大阪市に設立。

昭和43年(1968) 1 月

通産局の紹介で兵庫県多紀郡丹南町(現 篠山市)に丹南工場を新設しました。

昭和62年(1987)11月

丹南工場の隣接地に丹南第二工場を新設しました。

平成元年(1989)11月

工場を統合し、丹南製作所と改称しました。

平成11年(1998) 4 月

篠山町、丹南町、今田町、西紀町の 4 町が合併して篠山市が発足しました。

平成15年(2003)11月

子会社平和精機株式会社と合併。丹南製作所を篠山工場と改称しました。

現在、篠山工場では大手ベアリング各社から、ベアリング用冠型保持器、ワンウェークラッチ用爪付き側板、ロッカーアーム用側板、CVJ用側板等を受注し生産しています。

その他、皿ばね各種、ばね座金ほか各種ファスナー部品等も生産しています。

《篠山のすがた》

篠山市は兵庫県の中東部に位置し、兵庫県の市の中では 3 位の広さを有します。大阪、京都、神戸からも70km圏内にあり、JR福知山線（宝塚線）、JH舞鶴若狭道、国道R173,R176,R372が走り、面積377㎢、人口約 5 万人の自然環境豊かな生活文化圏であります。

また地勢については、南方に連山する山並み、これと平行して北方には多紀連山が東走し、盆地部はこうした山々に囲まれて広がっております。その中央部を篠山川が西流し加古川へと流れ、それとは別に南東部を西流している羽束川

は武庫川となり、これらは瀬戸内海に流れています。そして北部地区で北流している友淵川は由良川を経て日本海へ流れています。

気候は春秋はおおむね過ごしやすいのですが、冬は日本海の寒波に影響され、寒気は多少厳しく、夏は盆地特有の熱気が溜まって気温は上昇します。

多紀連山では、ジャクナゲやヒカゲツツジ等の高山系植物がみられ、イノシシ、ニホンザル、ニホンジカといった野生動物が生息しています。両生類では日本固有種であるモリアオガエルがみられ、初夏にはホタルの乱舞を各所で見るができます。



篠山市所在地

《篠山のおいたち》

篠山では、縄文・弥生時代にはすでに人々が生活しており、大化の改新後の律令国家時代には、仏教を中心とした高度な文化が栄えておりました。平安時代には京都の東寺領としての大山荘をはじめ、多くの荘園が設けられました。源平時代には、源義経が平家討伐時に京都からこの篠山を通過して播磨方面に進軍しましたが、この時にまつわる義経伝説が今も多く残っています。

中世の終わりには、波多野氏が高城山（篠山城の南東部）に八上城を築き、丹波一帯を勢力範囲としていました。織田信長は丹波攻略のため、明智光秀を差し向け1年余りの包囲攻めにより八上城を陥落させました。

その後、徳川家康が大阪方と山陰、山陽の連絡を絶つことと、西国大名に対する抑えを目的として、篠山盆地中央部の「笹山」に、西国20余りの大名を動員し天下普請として、平山城をわずか9ヶ月という短期間で築城しました。

篠山は江戸時代、『笹山』とも『篠山』とも書かれたようですが、明治初年からは『篠山』に統一されたようです。篠山藩は松平氏3家が8代、青山氏が6代にわたって藩政を司りましたが、明治維新の廃藩置県により、篠山地方は兵庫県に属することになりました。

篠山を含む丹波の農民は、江戸時代中期ごろから丹波杜氏として伊丹、池田、灘の酒屋へ「百日稼ぎ」に出向き活躍しました。これは彼等の冬季の貴重な現金収入源でもありました。

尼崎と篠山を結ぶ阪鶴鉄道が明治32年に開通し、日露戦争後の明治40年には歩兵第70連隊が設置され、町はにわかに活気づきました。また大正2年には篠山町中心部と現在のJR篠山口間をむすぶ篠山軽便鉄道が開通しました（昭和19年閉鎖されました）。その頃、篠山町商店街には、木造3階建ての旅館が建ち並び、70連隊の隆盛と商店街を走るフォードの乗り合いバスやメインストリートを走る人力車が賑やかに往来し、篠山は丹波随一の商都でありました。

現在、篠山城下町では、御徒町の武家屋敷群、河原町の商家群など、歴史的景観地として数多くの、見どころを残しています。

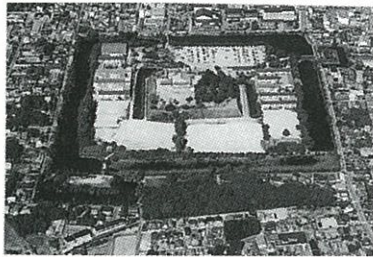
《篠山のみどころ》

1. 篠山城址

篠山城は別名「桐ヶ城」と呼ばれ、築城家の第一人者である藤堂高虎の縄張りで築かれた平山城です。方形400m、要所には二重の枳形や二層、三層の櫓を配した堅固な城郭です。城郭の主体部である「高石垣」と「外堀」「馬出し」

などが、ほとんど完全に遺構をとどめ、高い価値のある近世城郭であり、昭和31年に国の史跡に指定されています。

明治の廃藩置県後、大半の建物が取り壊された中、大書院だけが唯一の建物として残存しましたが、昭和19年の大火で焼失しました。この大書院は京都二条城二の丸御殿に匹敵する規模をもち、歴史的価値の高い建物であります。市民の努力もあり、平成12年往時の姿そのままに郷土のシンボルとして復元され、現在は篠山文化の発信拠点となっています。



篠山城址

2. 丹波立杭焼

瀬戸、常滑、信楽、備前、越前とともに日本六古窯の一つに数えられ、その発祥は平安時代末期から鎌倉時代の初めといわれています。桃山時代までは「穴窯」が使用されていましたが、慶長時代に「登り窯」が導入され、同時期に取り入れられた「蹴りロクロ」（日本では珍しい立杭独特の左回転ロクロ）とともに、伝統技術を今日に受け継いでいます。

登り窯による焼成は最高温度1300度に達しま



丹波立杭焼

すが、その結果燃料である松薪の灰が器の上に降りかかり、釉薬と融け合って窯変し、『灰被り』と呼ばれる魅力的な色や模様が一品ずつ異なって表れるという大きな特徴をもっています。このため実用だけでなく、鑑賞用としても愛陶家に広く知れ渡り、しかも作品の焼肌慣れ親しむほど、さらに色合いや模様が変化し趣を変えていきます。

3. 篠山町春日神社

慶長15年（1610）篠山城の北にある春日神社で、篠山城落成の能が華やかに演じられました。文久元年（1861）、時の藩主青山忠良が、この春日神社に入母屋造りの能楽殿を寄進しました。床下には音響をよくするため、丹波立杭焼の大瓶が十数個埋め込まれ、箱根以西でもっとも立派と評された舞台であります。現在は国の重要文化財に指定され、元日の『翁』、4月の『春日能』が催されています。

10月に催される秋祭りでは、華麗な山鉾や神輿が町内を巡行します。これらの山鉾や神輿は、京都の祇園祭の強い影響を受けていることが感じられます。



秋祭り（鏡山）

4. デカンショ祭

デカンショ節は明治時代、一高（現 東京大学）の愛唱歌にもなり全国に知られました。各

地域の寺社の境内や小学校校庭で、このデカンショ節にあわせて踊りあかした盆踊りが、昭和28年第一回デカンショ祭として河原町川原で開催され、昭和42年からは篠山城址に場所を移し、近年は8月15、16日に開催されています。

町内はもとより遠来の人達もそれぞれ「連」を組み、ステージ付きの大やぐらから流れるデカンショ節に合わせ、幾重もの輪を作り夜遅くまで踊りが続きます。当社工場も過去に「連」を組んで参加したことがあります。このほか、花火大会、デカンショ娘、花自動車のパレード、フリーマーケットなどもあります。



デカンショ祭

《篠山うまいもの》

篠山には多くの「うまいもの」がありますが、その中から三つご紹介します。

1. ぼたん鍋

今でこそ『ぼたん鍋』は全国どこでも通用しますが、知る人ぞ知る、明治期に丹波篠山で生まれました。多紀連山周辺は名産地で、丹波の



ぼたん鍋

猪肉は日本一といわれています。丹波の野の幸、山の幸で育った猪がうまくないはずがありません。秘伝の丹波味噌とよく合い実にうまく、食べると体がぽかぽか温まってきます。

2. 黒大豆

篠山の中央部は標高200mを超える高原盆地であります。霧の深い丹波特有の気候と粘土質の多い田畑で、江戸時代から栽培されており、その地域の名をとって『波部黒』『川北黒』などと呼ばれています。お正月のおせち料理にはかかすことのできないこの篠山の黒大豆は、丸くてふっくらした大粒で、色も漆黒で風味が格別であります。

ここ最近、この黒大豆は10月においしい枝豆として、酒やビールのおつまみになっており、京阪神はもとより全国各地の人々から愛されています。



黒枝豆、黒大豆

3. 丹波栗

栗は日本のほとんどの地域で収穫されます。丹波の栗が特に大粒で味がよいとして、全国的



丹波栗

に『丹波栗』の名で有名になったのは、昭和の初め頃といわれています。丹波地方では秋祭りに、各家庭でそれぞれ自慢の栗餅や栗めしを作ります。篠山には栗を素材にした栗羊羹、栗饅頭、栗納豆など、多くの栗菓子があります。

（平和発條株式会社 篠山工場 相原 弘臣）

